

版本『和漢三才図会』におけるレイアウトシステムの構造

小 谷 充*
(平成9年4月25日受理)

要 旨

書物は、各々の言語体系に則した可読性と造形性の質を維持するためのシステムを有している。電子メディアの出現によって書物自体の概念的変革を余儀なくされている状況を考えれば、我が国近世の書物文化をひとつのシステムとして確認し、表層的な意匠がもつ、古今を問わない本質的な思想を現代に還元する必要がある。本稿では、判型と版面の関係、版面位置及びマージンの決定要因、割り付けの基本単位に目的の範囲を限定し、18世紀初頭の版本『和漢三才図会』のレイアウトシステムの構造を中心に調査考察を試みた。結果、形態的及び思考的特質について以下の知見を得た。

- (1) 対象の版面は当時主流であった美濃本を75%縮小した形態である。
- (2) 版面内部を文字が入るべきグリッドによって分割し、レイアウトに適応する規範の存在。
- (3) グリッドはマージンを含めた範囲で機能している。
- (4) 判型は美濃本の変形サイズであり、製本後の見開きを割り付けの基本単位としている。

KEY WORDS

editorial design	エディトリアルデザイン	layout	レイアウト
Japanese-style binding	和装本	grid	グリッド

1. はじめに

書物は、書体や行間といった組版レベルや頁単位のレイアウトのレベル、頁割りや装幀を含めた図書設計のレベルなど、緻密で一貫した計画を要する一種の構造物である。それは、また、各々の言語体系に則した可読性と造形性の質を維持するためのシステムを有している。

明治期に流入した西欧の活版印刷術や製本術をベースにした現代の書物は、技術的には躍進したものの、機能と造形の均衡といった根底に求められる概念は変容していない。しかし、このような体系が西欧の文脈上にあることは明確であり、江戸期に隆盛を誇った東洋の手工的書物文化が黙視されている状況は指摘するまでもない。電子メディアの出現によって書物自体の概念的変革を余儀なくされている状況を考えれば、近世の書物文化をひとつのシステムとして確認し、表層的な意匠がもつ、古今を問わない本質的な思想を現代に還元する必要がある。

我が国において、書物が特権階級の産物からより多くの人々へ流布したのは17世紀中庸のこ

* 芸術系教育講座

とである。書物の成立及び分類を研究対象とする書誌学における版本の研究成果は、今日のエディトリアルデザイン¹⁾に多くの示唆を与えているが、その情報自体の扱いや造形性といった「編集意匠」については言及されていない。また、エディトリアルデザインの領域において、合理的と解釈される西欧の図書設計やその影響を受けた近代の書物、とりわけ活字組版による書物の歴史的技術的研究はおこなわれているものの、日本の近世の書物を研究対象とする例は少ない。

本稿では、書物が文化的爛熟をみた18世紀初頭の版本『和漢三才図会』を対象として、エディトリアルデザインの見地からレイアウトシステムの構造を中心に調査考察を試みる。

2. 調査概要

2.1. 目的

今日のエディトリアルデザインでは、書物の体裁を整え、多工程での規範として作用するレイアウトシステムの存在は不可欠である。それは、レイアウト工程が分業化している現状に対して書物の全頁に一貫性を持たせるための措置であるし、編集者や印刷業者に対しての最低限の規範として作用している。近世の書物においてもその造本工程が分業体制にあったことは歴史的に明らか²⁾であり、ある種のレイアウトシステムが機能していたことは容易に想像される。システムの構築は、書物設計においてもっとも重要かつ基本的なものであり、そこに意匠の論理が充溢している。本稿では、以下に問題の範囲を限定し、対象のレイアウトシステムの特徴を明らかにしたい。

(1) 判型と版面の関係

今日ではデザインプロセスとして、AB列を前提として判型(はんけい)³⁾が定められ、後に組版設計をおこない、版面(はんづら)⁴⁾を決定する。版面の面積は文字の大きさ、字送りと行送り、一行字詰めと行数の制約によるので、一般的に判型と版面には比率による関連はない。江戸時代中期の製版は五山版式⁵⁾が主流で、木活字を使用したものは希である。つまり、版面の決定は組版による制約を受けないわけであるから、版面決定に際して、恣意的であれ論理的であれ何らかの要因が作用していたとおもわれる。

(2) 版面位置及びマージンの決定要因

版面は文字によって生成される面(グレイスペース)である。決定された版面の配置は紙面上の図と地の均衡の設計であり、書物の性格を決定する重要な要素でもある。今日では、決定された版面を書物の仕上がり寸の「天」もしくは「地」、 「小口」もしくは「のど」から追っていくのが通例である。江戸時代の版本では版面の配置をどのように決定し、それによって生じるマージン(余白)をどのように捉えていたのか。

(3) 割り付けの基本単位

現在の書物は、通常、見開きの二頁を基本単位として割り付けされている。江戸時代の版本の多くは「包背装」もしくは「線装」と呼ばれる製本方法で、両者とも袋綴じの形態を呈する。印刷工程では無論、一葉⁶⁾を基本単位として印刷するわけであるから、印刷時と製本後の見開きでは観念の逆転が起こる。製本後の見開きを想定して計画的に割り付けをおこなっているか否かは、意匠的行為の存在を計る有力な要素となる。

2.2. 調査対象

『和漢三才図会』105巻81冊漢文記述，分類：事典，著者：寺島良安（大阪，医家），正徳2年（1712）自序，同5年（1715）跋，（筑波大学中央図書館蔵）〔資料1〕

所収項目は天・人・地の三才の大部に分類し，図像を多用し，利用法は学問的立場よりは常識的立場をとっている。⁷⁾本稿において対象とする正徳本のほか，文政7年（1824）の刊本，『増補和漢三才図会大全』天保元年（1830）の写本，『倭漢三才図会』明治17～21年の活字本，『和漢三才図会』明治39年の印影本，『日本庶民生活史料集成28・29巻』1980年の縮刷本，東洋文庫の縮刷本があり，近代に至るまで広く長く便利とされている。現代では当時の生活習慣や観念を知る民俗学的な資料として貴重とされている。

2.3. 関連書籍の事前調査

「概ね王氏の三才図会に擬ふ」⁸⁾と，著者良安の自序にもあるように，対象は明代の版本『三才図会』王圻，王思義（国立国会図書館蔵）を模している。対象の構造を調査する前段階として，『三才図会』の事前調査をおこなったが，図像や編集方針の影響は強くみられるもののレイアウトシステム上の類似性はなかった。〔資料2〕

3. 調査及び考察1

3.1. 調査1

3.1.1 調査方法

誤差を極力抑えるために対象を解体して，一葉を基本単位とする。しかるのちに，対象の主要な罫線⁹⁾及び判型の実測をおこない，空間の比率を抽出する。

3.1.2 調査結果

〔資料3〕の実測値及び比率が得られた。

3.2. 考察1

3.2.1 比率関係と美濃紙

縦横の比率から，判型と版面には単純な比率関係は認められなかった。同様に，判型とマージン，版面とマージン等の空間にも単純な比率関係はない。

判型 横362mm / 縦272mm = 1.330

版面 横314mm / 縦206mm = 1.524

江戸時代の版本の多くは「美濃紙」を基本に判型が決められているが，「産地によって，また同一の産地でも，大中小の差があって，必ずしも寸法が一定しておらず，また仕上げのさいの化粧裁ちの深淺もあって，（中略）いまの規格判のように一定した寸法にはならず，若干の相違がある（略）」¹⁰⁾しかし，一般的には裁ち寸およそ横1尺7寸3分，縦9寸（415mm×273mm）の「小直紙」と呼ばれる美濃紙が書物に使用されていた。この小直紙の縦寸が対象の縦寸と同じであることから，対象は美濃本を基本にした変形サイズであることが推測される。そこで小直紙と対象の比率関係をみる。

小直紙（裁ち寸） 横415mm / 縦273mm = 1.520

定形の一辺を裁断したであろう対象の判型との比率関係はみられない。また、判型にこのような変形サイズを採用した決定要因を調査1から読みとることは困難である。ここでは、版面と小直紙がほぼ同じ比率であることに着目したい。

3.2.2 単純比による構成

対象の版面は小直紙とほぼ同じ比率を有していて、その縮小率は版面3に対して小直紙4という比によって構成されている。対象の判型の縦横比も同じく3:4であることから、対象の設計は、意識的な単純比によって構成されていると考えられる。

江戸期の比例観念は、元和8年(1622)毛利重能『割算書』、元和8年(1622)百川治兵衛『諸勘分物』、寛永4年(1627)吉田光由『塵劫記』、寛永16年(1639)今村知商『竖亥録』、寛永17年(1640)今村知商『因帰算歌』等の算学書の出版にもみられるように、広く定着していた。なかでも著名な『塵劫記』は、多くの改訂版を出版している。内容としては、売買・通貨・利子についてや、ねずみ算や面積の求め方に至るまで図解入りで説明している。「びやうぶに箔をくつもの事」という章では、屏風の寸法とそこに貼り付けていく箔について尺貫法で述べている。このほかにも「こうばいののびの事」では、角度について述べるなど興味深い記事がおおい。これから考えると、江戸時代初期には既に算術によって金融、検地はもとより屏風のような工芸品をもとらえる習慣があったといえる。また、仏教建築に不可欠な技術として $1:\sqrt{2}$ の比率法や桂離宮に黄金比が使われていることは広く知られている。

単純比や黄金分割の適応は、かならずしもその造形性に直結するわけではない。しかし、恣意的な数値による設計は、膨大な反復作業によって形態の変容をまねく原因となる。幾何的な設計は反復性に富み、同一形態の相乗累積によってひとつのシステムとして機能する。

書物の制作は多くの職人によって分業化されていた。それにもかかわらず、全105巻81冊という対象の容量に対して、版面の大きさが常に一定である事実から、恣意的な数値による設計を避け、単純比によって構成する方法を意図的にとっていると考えられる。

3.2.3 「見立て」と記号論的解釈

対象の版面は小直紙とほぼ同じ比率を有していて、版面が小直紙の75%のサイズであることが確認された。つまり、美濃本の縮小されたものが紙面に取まっていると言い換えることができる。

「書物の中に書物が取まっている」という意匠の観念を当時の思想からみれば、「類似性を媒介にして、連想を喚起し、対象物を分節していく」¹¹⁾見立ての概念に通じる。「見立て」は本来、なぞらえる、仮定する、見なす等の意味を持つが、その手法は和歌や俳諧のみでなく、文化全般に根ざしている。枯山水の庭園の白州の岩を島に見立てるように実体を別の実体になぞらえたり、歌舞伎の黒子を見えないものと認識して存在を非存在として仮定したり、祭りの依代をカミが憑いたものととらえて実体を非実体として見なす等の行為はすべて「見立て」と呼ばれる。つまり、「見立て」は言語や形態、色や材質、時間や空間等に、一時的もしくは恒常的に2次の意味を生成する人為的な手法であるといえよう。

さらに、ソシュール¹²⁾に代表される記号論的解釈を試みれば、版面を「書物」と見立てる行為は、版面の共示的意味(コノテーション)の生成と捉えることができる。「版面」という記号形態は、記号表現(シニフィアン)としては「罫線で囲まれ、内部空間が文字及び図像で構成されたもの」であり、記号内容(シニフィエ)としては「情報が記述された本文部」である。しかし、この記号表現及び記号内容は一次レベルであって、この記号内容は外示的意味(デノ

ーション)でしかない。このような記号表現と記号内容を内包する「版面」は、二次レベルで「書物」という記号内容を共示的意味として内包しているのである。

現代の書物に置き換えて解説すれば、A 4判の書物の見開き頁に A 5サイズの罫線に囲まれた面があって、その中に文章があるとす。A 5判は文庫本の見開きサイズであって、その中の文章が文庫本と同じ組版になっていれば、我々は A 4判の書物を見ながらにして、そこに文庫本の見開きを連想するだろう。それがここでいう共示的意味の生成であり、「書物の中に書物が収まっている」という意匠の観念なのである。

つまり、対象は版面を当時主流であった美濃本の判型に「類似」させることによって「連想性」を喚起し、書物の中に「書物」が存在しているという「共示的意味」を生成しているといえることができる。

それでは上述のような周到な方法を用いて、徹底して版面とマージンを差異化する目的は何であろうか。

版本における天のマージンが、読者が注釈を書き込むためのものであることは知られている。対象もやはり天に充分なマージンが準備してあり、事典という書物の性格を勘案しても、注釈を書き込む余白であると理解できる。

対象の版面の四周には、罫線が引かれている。罫線は通常、性質の異なるものを分かつ働きを担うが、この場合、本文部と注釈のための余白部分を差異化するものとして作用している。思想的背景からいえば、「ハレ(=非日常的な空間及び時間)」としての本文と「ケ(=日常性)」としての余白部分の対置であり、罫線は「結界」として作用する。民俗学において、「ハレ」は行為者によって明確に意識化される「考えられた系」¹³⁾として認識されることから、本文が「考えられた系」として聖域化されていたことは十分に考える。東洋には古くから、言語行為と霊性が切り離せない存在論的結節だと見なす言霊(ことだま)観があった。言語が身体性を伴い、宗教的体験に根ざすという独自の宇宙観は、発声言語や文字に霊性の存在を了解していたのである。¹⁴⁾そういった文字の累積である教典や書物は、ある種の結界によって俗と差異化された場に保管される。手書きの写本から印刷された版本へメディアが移行するにつれ、このような言霊観は薄れていったとおもわれる。しかし、和漢籍の様式がすでに言霊観を反映したものであれば、根元的に文字を神聖視する構造を持っているといえる。

以上から、対象は版面の四周の罫線を「結界」にして、マージンは本文と区別してすでに外界であり、読者の書き込みが許される空間として認識されていたといえることができる。

4. 調査及び考察 2

4.1. 調査 2

4.1.1 調査方法

調査 1 と同様に一葉を基本単位として、対象の文字組みの実測をおこない、その規範を抽出する。

4.1.2 調査結果

本文の文字は横約 8 mm×縦約 8～9 mm と一定せず、明確なボディは判明しなかった。しかし、全体としては極めて統制の取れた文字組みとなっている。そこで、版面内部の字詰め及び

行詰めから、1行22字詰め、一葉30行の[資料4]のグリッドが得られた。

152mm (半葉の版面幅) - 2 mm (罫線と文字間) / 15行 = 10mm (一文字の幅 + 行間)

206mm (版面の高さ) - 2 mm (罫線と文字間) / 22字 = 9.27mm (一文字の高さ)

4.2. 考察2

4.2.1 活字使用の判別

今日では本文の文字組みを基本モジュールとして、レイアウトシステムを構築する。活字や写真植字によって一定の字間及び行間を維持できる場合、本文の文字の大きさが常に最小の単位となる。それゆえに、対象のレイアウトシステムを考察する上で、活字使用の有無は極めて重要である。対象の本文及び見出し等の文字の特質については別稿に譲り、ここでは活字使用の可能性を論じることとする。

活字が我が国において使用されはじめたのは、16世紀末とされている。天正18年(1590)にイエズス会の少年遣欧使節団によって、グーテンベルク式の西洋活版印刷術が伝来した。しかし、徳川幕府が慶長17年(1612)に禁教を発令し、寛永14-15年(1637-38)島原の乱を境に根絶してしまう。また、文禄2年(1593)には文禄の役休戦による凱旋の際に、朝鮮式活字印刷術が将来している。銅活字などが戦利品として後陽成天皇へ献上されて勅版が印刷されているが、慶長期にはいと木刻の木活字が使用されはじめる。しかし、経済効率の低さ¹⁰⁾が原因となって、寛永期には五山版式の製版方法に戻り、木活字も没却された。これらの活字は、慶長期に本木昌造によって伝えられた活字と区別して古活字と称される。

そういった特殊な時代背景からみると、古活字文化が衰退して1世紀を経て出版された対象の活字使用は考えにくい。また、文字の明確なボディが判明しなかった調査結果や文字に添えられた返り点等の形状からも、対象は旧来の五山版式の製版方法によるものと考えるのが妥当である。

4.2.2 グリッドの検証

対象の文字組みには、活字組版のような均質性はみられない。しかし、全体として統制のとれた文字組みから考えれば、調査結果で得られた平均的グリッドがフォーマットとして機能していた可能性は十分にある。ここでは、平均的グリッドをフォーマットと仮定して、対象に還元することでその機能を検証したい。[資料5]

- (1) 全巻を通して掲出される図像部の横幅は、5文字 + 4行間に相当する。例外は半葉(15文字 + 16行間)をすべて図像にあてている。
- (2) 図像部と本文は、罫線によって分割されている。この罫線の位置は、常にグリッドのいずれかの分割線の位置と符合している。
- (3) 図像の高さは、12文字分が基本である。例外は1文字単位で縦に広がっている。
- (4) 図像とその見出し語及び注釈は、罫線によって分割されている。この罫線の位置は、常にグリッドのいずれかの分割線の位置と符合している。
- (5) 項目を分ける分割線は、常にグリッドのいずれかの分割線の位置と符合している。

以上の検証から、調査結果で得られた平均的グリッドが、割り付けの際の規範として成立していることがわかる。ここにおいて、この平均的グリッドがフォーマットとして機能しているという確信を得ることができた。

4.2.3 グリッドの延長

試みに平均的グリッドをマージンへ延長することによって以下の構造 [資料 6] を確認することができた。

- (1) 1文字高さ (9.27mm) を基準とすると、天のマージン (56mm±1) は6文字分 (55.62mm) に相当する。
- (2) 1文字高さ (9.27mm) を基準とすると、地のマージン (10mm±1) は1文字分に相当する。
- (3) 1文字幅 (8 mm) と行間 (2 mm) を基準とすると、版面左のマージン (24mm) は2.5文字+2行間に相当する。
- (4) 1文字幅 (8 mm) と行間 (2 mm) を基準とすると、版面右のマージン (24mm) は2.5文字+2行間に相当する。
- (5) 1文字幅 (8 mm) と行間 (2 mm) を基準とすると、製本時に糸で膝られる綴じ線と版面の距離 (14mm) は1.5文字+1行間に相当する。
- (6) 版心¹⁶⁾では不都合が生じていて、一葉単位ではグリッドの延長が成立しない。

4.2.4 マージンの構造

グリッドを延長することで確認されたマージンの構造は、実測誤差を考慮しても偶然とは考えられない整然としたものである。

さらに、構造の意味をまとめると、第1に、対象の縦の空間は1文字を1ユニットとしてマージンを含めた範囲で決定されている。

第2に、対象の横の空間は半葉ごとに、1文字+1行間を基本としてマージンを含めた範囲で決定されている。しかも、版面左右のマージンが0.5文字分の端数を生じたことは、極めて興味深い。版心では不都合が生じていて、一葉単位のグリッドの延長が成立しないことを考え合わせると、次の仮説を立てることができる。

袋綴じによって製本後の見開きが「半葉+半葉」となり、印刷工程での見開きと観念の逆転が起こることは前述した。製本後の「のど」にあたる半葉の0.5文字分の端数は、「半葉+半葉」で1文字分となる。製本時の見開きの版面同士の距離は5文字+4行間に相当し、綴じ線を「のど」とみれば、版面同士の距離は3文字+2行間に相当する。つまり、製本後の見開きの空間が均一にグリッドで分割されることになり、割り付けの段階から製本後の見開きを想定して設計されていたと考えられないだろうか。

あわせて、3.2.1で保留した、定形の一辺を裁断したであろう対象の変形サイズの決定要因においても、以上の仮説から一応の結論を導くことができる。調査1では、対象の判型が美濃判の「のど」を裁断した変形サイズであることについて言及したが、その要因について読みとることはできなかった。しかし、前述の製本後の見開きの空間を均一にグリッドで分割するために、グリッドに符合した位置を裁断した結果、変形サイズになったと考えれば整合性がある。

5. 結論

調査考察1, 2から、版本『和漢三才図会』のレイアウトシステムにおける形態的、思考的特質を知ることができた。

第1に、対象の版面が当時主流であった美濃本を75%縮小した形態であるという点である。

この形態的特質から、版面に共示的意味を発生させ、本文とマージンを差異化する思考的特質の存在を指摘した。

第2に、版面内部を文字が入るべきグリッドによって分割し、レイアウトに適応するという原稿用紙的な規範の存在である。活字の大きさを1ユニットにしてフォーマットを設計する書物は、いわば物理的な要因によって制約されている。あらかじめ空間を分割して、版下を清書していったであろう対象の方法は、活字を用いる製版方法とは明らかに対照的ではある。しかし、図像の配置や罫線の配置が、設定したグリッドを規範に構築されているさまは、今日のレイアウト手法と重なりあう。

第3に、そのグリッドがマージンを含めた範囲で機能していることである。今日の商業ベースに乗った書物では定形サイズが制約となって、マージンを含めてグリッドで設計することは容易ではない。対象の「小口」にあたる版心を除いた範囲で、製本後の見開きがグリッドで覆われる構造は極めて特殊であるといえる。また、このような合理的で幾何的な構造の判明の意義は大きい。

第4に、対象の判型が美濃本の変形サイズであるという事実である。これは、考察2において「のど」もしくは「版面と版面の関係」の整合性をグリッドに求めたためであり、製本後の見開きを想定して設計がおこなわれたという仮説を立てるに至った。

これらの特質から、対象は技術的限界の範囲で目的合理的な設計意匠をおこなっているといえる。また、変形サイズを採用する意匠は、かならずしも経済的とはいえないが、書物に一貫する意匠の観念を十二分に表出させている。それは、比率とグリッドによる分割によって恣意的な設計をひかえ、反復性を重視した極めて効率的な手法である。しかし、このような書物のデザインが当時一般的であったととらえるのは危険であろう。事典という書物分類上、その大容量を合理的に処理するために用いられた手法であって、他分類の書物と同じ地平で考えることはできない。ここで特筆すべきは、江戸時代中庸の五山版式製版方法によった『和漢三才図会』が、すでにグリッドによるレイアウトシステムを採用している事実なのである。そして、その表層的な意匠の背景に、視覚言語によって空間を差異化し、工程を考慮した合理的設計の採用というある種の思想の存在を忘れてはならない。

現代の書物のデザインの多くが、商業基盤に乗った表面的なデザインに終止している状況がある。電子メディアにいたっては、機能性と造形性の均衡をコントロールするエディトリアルデザインの本質から逸脱したものもみられる。洋の東西を問わず中世から現代へと築かれた編集意匠の文化的財産を認知することなく安易に装飾的設計に向かうことは避けなければならない。

本稿では、版本『和漢三才図会』のレイアウトシステム、特にそのフォーマットについて調査をおこなったが、より編集的な要素である書体や組版等の継続調査を予定している。また、同時代同分類の書物についても調査をおこない、当時のレイアウトシステムの構造体系を明らかにしたい。

〔資料1〕『和漢三才図会』の代表的な見開き（上）とその一葉（下）

日月廣大辨

天經求問曰地闊九方里而日大於地百六十五倍八之
三地大乎月三十八倍三之然則日月大乎月六十五百
三十八倍又五之一也蓋月之天也于地日夫亦遠凡日月
所照近者雖小亦大遠者雖大亦小妙攝此奇量之則
地闊九方里 月周千四百九十二方四十七百余里
△按右里數以聲言之射下地如大巨粒而且如御米
子日猶拳棋相如
今案蔽風大豆雖香遠何有所隱乎然北地有夜國不
見日光處則雖有用凡火遠望之皆隱也日光本婆娑
數不可能所知然不可近以望遠鏡雖視之其際限以
里數者億見耳張衡靈憲曰日月徑當天周七百三十
六分之一天周八百四十二萬里此亦未精也




月
音

玉兔 玉蟾
瑤琪 本海鏡
音訓豆故
千氏云月字
上關中二重
連左不連右

釋名云月闕也月滿則缺也徐氏云陰不可掩陰臣不可
蔽若故於文闕者為月以其闕之時多也
月輪郭無光處曰魄 死魄朔也生魄望也 月死為
灰反則晦也 月死復蘇生為朔朔則蘇也 月半形
若孛孛為盈也壯曰壯曰望 月滿而日月相望者為
望 晦而月見西方謂之魄 朔而月見東方謂之魄
登壇必免云月者陰之精其形圓其質清日光照之則見
其光日光所不照則謂之魄故望乃日月相望人居其間
盡觀其明故形圓也二弦乃日照其側人觀其傍故半明
半魄也晦明乃日照其表人在其裏故不見也

月桂

本草綱目云月桂辛溫治小兒月蝕瘡
時珍曰果剛伐月桂之說起于隋唐小兒月蝕瘡子之說
起于武后之時 唐書云神武卿在月桂子降于小兒宋
仁宗帝軀連脚枕列靈隱寺月桂子降如雨杓以進皇寺
僧種之得二十五株換殿則月中真若有樹矣癸卯月乃
除魄共中華遊者山河影照月既無樹則空中所墜者何
物耶之觀神史有兩犀沙土石兩金鈴銀珠兩紫帛數葉



月
音

玉兔 玉蟾
瑤琪 本海鏡
音訓豆故
千氏云月字
上關中二重
連左不連右

釋名云月闕也月滿則缺也徐氏云陰不可掩陰臣不可
蔽若故於文闕者為月以其闕之時多也
月輪郭無光處曰魄 死魄朔也生魄望也 月死為
灰反則晦也 月死復蘇生為朔朔則蘇也 月半形
若孛孛為盈也壯曰壯曰望 月滿而日月相望者為
望 晦而月見西方謂之魄 朔而月見東方謂之魄
登壇必免云月者陰之精其形圓其質清日光照之則見
其光日光所不照則謂之魄故望乃日月相望人居其間
盡觀其明故形圓也二弦乃日照其側人觀其傍故半明
半魄也晦明乃日照其表人在其裏故不見也

月行有遲疾其極遲則日行十二度極其極疾則日行十
四度半強其遲極漸疾疾極漸遲二十七度半強而遲疾
一終矣
在黃道表裏極遠者去黃道亦度二十七度有奇而陰
陽一終矣

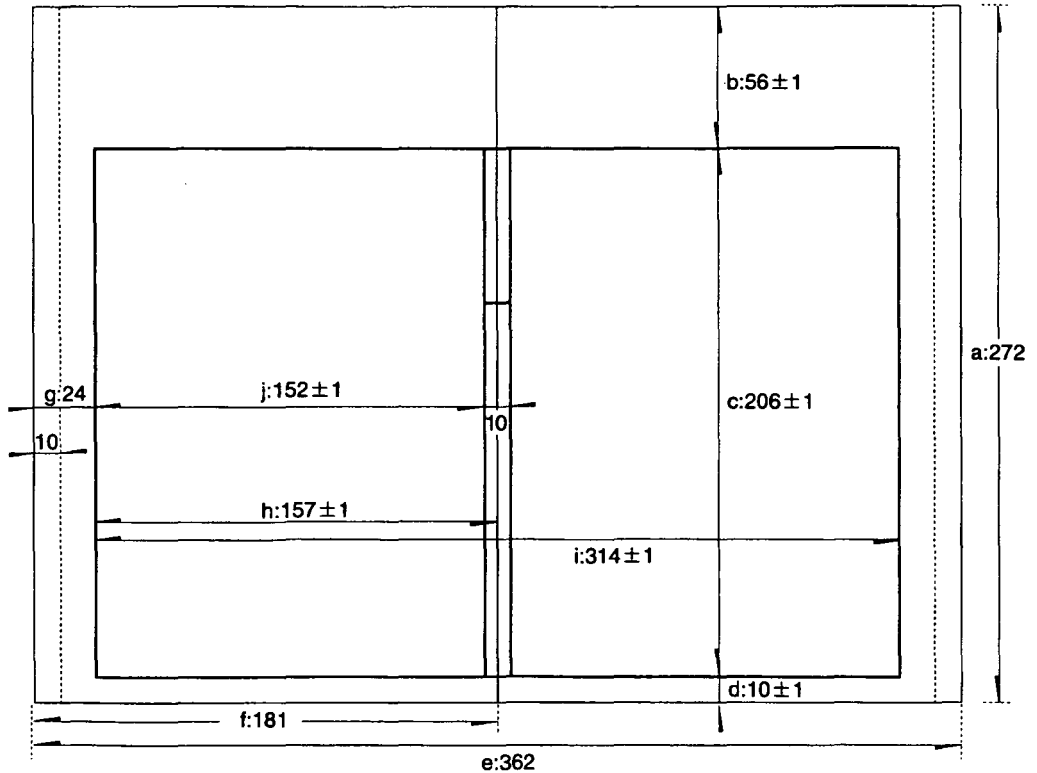
【資料2】『三才図会』の一葉（左右）

二星在紫微宮內尚書之西主施德周給者其占以不明
為宜明則新君踐位隋志云尚書西二星為陰陽陽德主
周給職攝又分為二星委文曰陰德星中宮女主之象動
搖則聲起宮成內者形之也門內東南隅五星曰尚書主
納百務歸龍作納百此之象也張衡云八星大臣之象其
占與四輔不殊極東一星曰柱下史左右記君之過星明
則史辭直不明反是柱下北一星曰女史婦人之極者主
得端故漢有侍史張衡云尚書也主記后宮之事占與柱
史同御女宮四星在紫微宮內勾陳之東北八十二輪星
三才圖會卷之一 天文

日有承短由地有升降春秋分時地適當天之中其日出
卯入酉且行中陸故長短勻由春分卯夏至陽日升地日
降而下其日出寅入戌且行北陸故承由秋分而不至陽
日降地日升而上其日出辰入申且行南陸故短

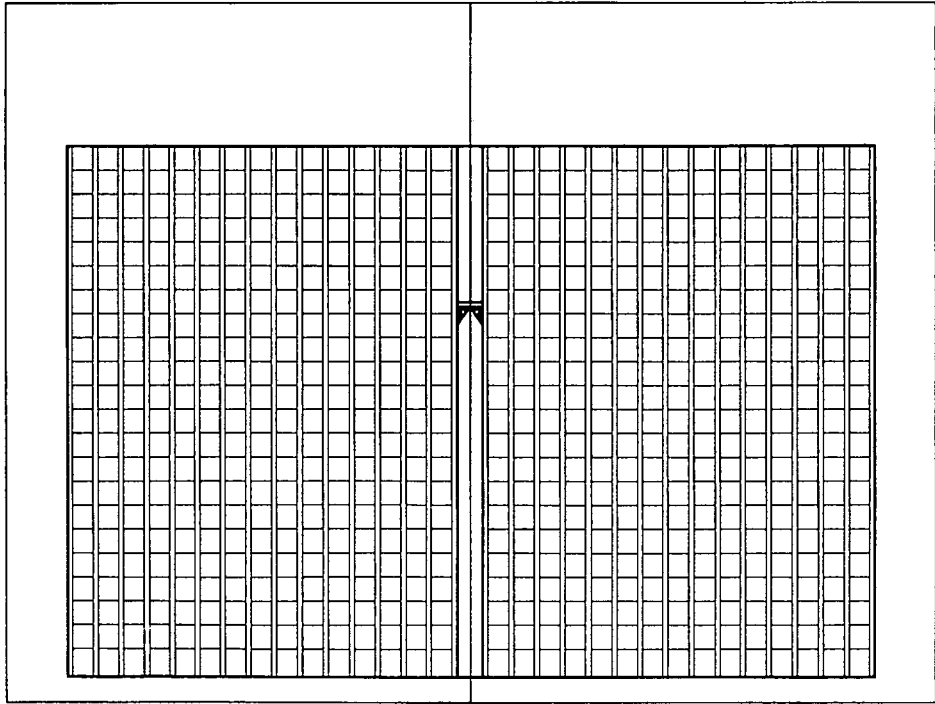
圖 之 道 中 陽 太

【資料3】実測値と比率（単位：mm）



a / b = 272 / 56 = 4.86	a / i = 272 / 314 = 0.87	b / h = 56 / 157 = 0.36	c / h = 206 / 157 = 1.31	e / j = 362 / 152 = 2.38
a / c = 272 / 206 = 1.32	a / j = 272 / 152 = 1.79	b / i = 56 / 314 = 0.18	c / i = 206 / 314 = 0.66	g / h = 24 / 157 = 0.15
a / d = 272 / 10 = 27.2	b / c = 56 / 206 = 0.27	b / j = 56 / 152 = 0.37	c / j = 206 / 152 = 1.36	g / i = 24 / 314 = 0.08
a / e = 272 / 362 = 0.75	b / d = 56 / 10 = 5.6	c / d = 206 / 10 = 20.6	e / f = 362 / 181 = 2	g / j = 24 / 152 = 0.16
a / f = 272 / 181 = 1.5	b / e = 56 / 362 = 0.15	c / e = 206 / 362 = 0.57	e / g = 362 / 24 = 15.08	h / i = 157 / 314 = 0.5
a / g = 272 / 24 = 11.33	b / f = 56 / 181 = 0.31	c / f = 206 / 181 = 1.14	e / h = 362 / 157 = 2.31	h / j = 157 / 152 = 1.03
a / h = 272 / 157 = 1.73	b / g = 56 / 24 = 2.33	c / g = 206 / 24 = 8.58	e / i = 362 / 314 = 1.15	i / j = 314 / 152 = 2.07

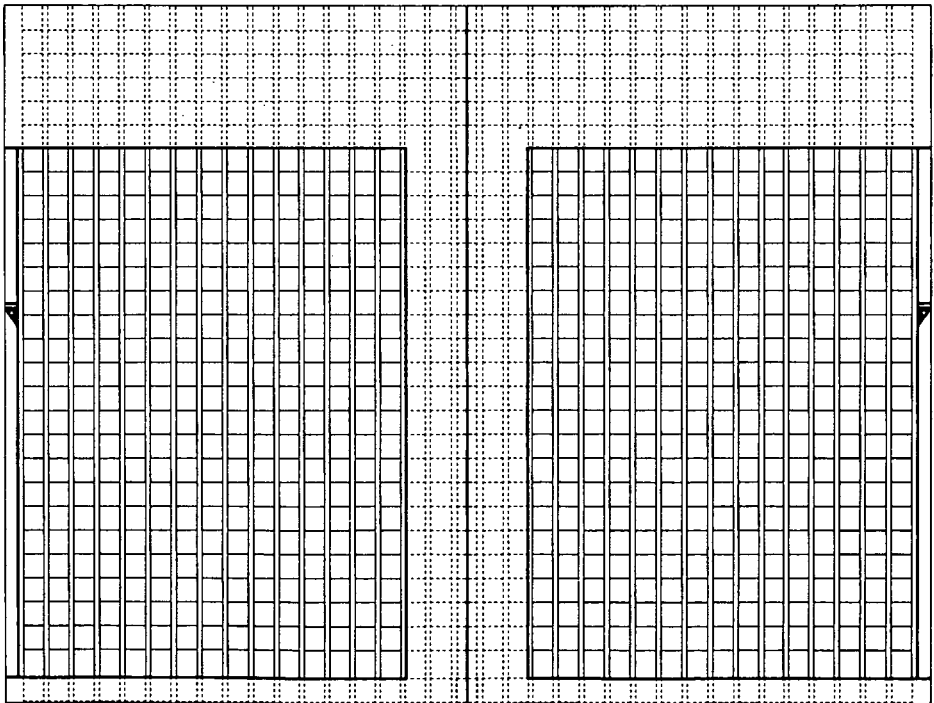
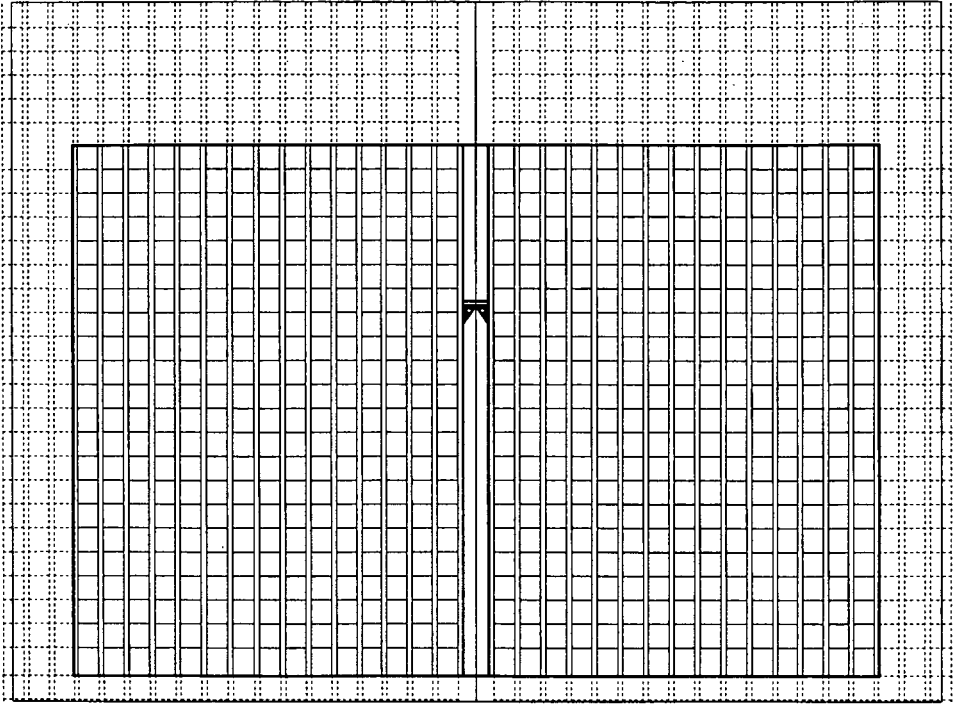
[資料4] 版面内部の平均的グリッド



[資料5] グリッドの検証

<p>一等 天星 數十七 五帝 座 織女 之 類 觀 行 明</p>	<p>先 聖 相 及 曰 禮 居 其 宿 曰 守 守 之 而 又 曰 復 曰 還</p>	<p>周 禮 曰 繞 東 西 曰 鉤 南 北 曰 紘 星 曰 相 陵 曰 食 七 寸 以 內</p>	<p>宿 曰 離 失 次 下 二 宿 曰 縮 在 下 而 上 曰 縮 又 失 次 上 二 三</p>	<p>經 之 曰 離 相 擊 曰 闕 曰 出 曰 離 脫 出 曰 縮 又 失 次 上 二 三</p>	<p>登 壇 必 齊 云 凡 星 居 之 曰 次 次 云 離 同 舍 曰 合 變 爲 此 星</p>	<p>薄 博 物 志 云 宿 星 猶 公 卿 聚 星 猶 萬 民</p>	<p>○</p>	<p>星</p>	<p>和名 星 古 文</p>	<p>以爲 帝 釋 與 彌 羅 之 戰 或 爲 日 月 之 毒 樹 者 共 可 笑</p>
<p>月 夏 至 見 東 井 八 月 秋 分 見 角 九 十 一 月 冬 至 見 牽 牛 出</p>	<p>登 壇 必 齊 云 辰 星 宰 相 之 祥 也 當 以 二 月 春 分 見 奎 角 五</p>	<p>○</p>	<p>辰 星</p>	<p>八 輪 經 云 去 東 井 九 尺 來 井 離 辰 各 月 七 日</p>	<p>水 曜</p>	<p>生 於 申 壯 於 子 死 於 辰</p>	<p>二 日</p>	<p>三 寸</p>	<p>子 死 於 辰</p>	<p>生 於 申 壯 於 子 死 於 辰</p>
<p>為 星 經 天 其 國 天 饑 人 相 食 蔡 氏 經 天 首 兵 火</p>	<p>五星 經 天 則 凶 出 于 圖 書 編</p>	<p>八 輪 所 謂 春 分 見 奎 角 之 角 字 當 作 婁 又 授 時 曆 云 辰 星</p>	<p>前 於 日 後 於 日 不 過 二 十 三 度</p>	<p>出 于 圖 書 編</p>						

[資料6] グリッドの延長 (上) と割り付けの基本単位 (下)



註

- 1) 写真, イラストレーション, 記号, 図表などの視覚言語や文字を用いて, ひとつの秩序を持った書物や雑誌を制作するデザインをいう。編集と同等の立場に立って, 書物の編集方針や構造をコントロールすることから, 今日では編集的要素を伴った媒体のデザイン全般をさす。
- 2) 鈴木敏夫: 江戸の本屋 (上), 中央公論社, 1980
長澤規矩也: 図解和漢印刷史<解説編>, 汲古書院, 1976
- 3) 判型は今日, A列B列が主流となっている。これらは二等分の法則及び相似の法則から合理的な紙取りとして有益であるし, ISO等の法規的また習慣, 販売時における利便性によるものである。例外的に変形サイズの版型をもつ書物もみられるが, これは書店に並べられた場合, 他紙との差別化を計る戦略的な手段である。
- 4) ページ中で文字の占めている範囲を版面と称する。版本は版面の四周を罫線で囲む習慣があり, 版面位置の特定は現代の書物と比較して容易である。
- 5) 五山版とは, 鎌倉・室町時代に, 五山を中心に禅僧によって出版された, 宋元明・朝鮮刊本の復刻本及び宋元版の様式を備えた刊本である。その製版方法は, 版下をもとに一枚板を彫り込み, 版木とする。
- 6) 印刷された製本以前の紙一枚を一葉と呼ぶ。一葉は2ページにあたり, その1ページを半葉と呼ぶ。本稿では, 製本後の見開き2ページを区別して「半葉」+「半葉」と呼ぶこととする。
- 7) 国史大辞典編集委員会編: 国史大辞典, 第14巻, 吉川弘文館, P.871-872, 1993
- 8) 寺島良安, 遠藤鎮雄訳: 日本庶民生活史料集成, 第28巻, P.4, 1980
- 9) 書誌学では, 版面の四周の線を欄線と呼ぶように, 線の性質によって名称を区別するが, ここでは便宜上全ての線を罫線と呼ぶ。
- 10) 鈴木敏夫: 前掲書, P.38, 1980
- 11) 磯崎新: 見立ての手法, 鹿島出版会, P.128, 1990
- 12) Ferdinand de Saussure, スイスの言語学者。合理的・体系的なモデルによる文化研究から非合理的の無意識という力動的記号学をめざした彼の理論は, 構造主義言語学の原点とされている。
- 13) 今村仁司編: 現代思想を読む事典, 講談社, P.490-491, 1988
- 14) 鎌田東二: 記号と言霊, 青弓社, 1990
- 15) 長澤規矩也: 和漢書の印刷とその歴史, 吉川弘文館, P.139-142, 1952
古活字は, 印刷が完了すると版を解体し, 活字を次の印刷物に使用した。重版の際には, 新たに組版をおこなうので効率的でない。五山版式製版方法では, 版木を保管していれば容易に重版をおこなうことができるので経済効率が高い。明治期以降の活字印刷では, 組版された活字の紙型をとり, それに鉛を流し込んだものを版とした。紙型の保管によって, 重版の際にも, あらたに組版する必要はない。
- 16) 書誌学で版面の中央を版心と呼ぶ。版心には通常, 書籍名や巻数, 頁数が記される。

A Study on The Editorial Design of 'Wakan Sansai Zue'

Mitsuru KOTANI*

ABSTRACT

In this paper I will attempt to research and consider the structure of the layout system of 'Wakan Sansai Zue', Japanese-style binding in the 18th century. I have restricted the subjects being considered, to the relation between trim size and type area, factors for deciding type area position and margin, and basis unit of layout.

As a result, I was able to find the following particulars to the forming style of 'Wakan Sansai Zue'.

1. The type area of 'Wakan Sansai Zue' was reduced from that of the 'book of Mino-style' that was the main current style in the Edo era.
2. There was rule of layout that was a system of partition by grid to hold the character within the type area.
3. The function of the grid included the margin.
4. The trim size of 'Wakan Sansai Zue' was transformed from the 'book of Mino-style' and the basis unit of layout was created by looking at the spread after binding.

* Division of Fine Arts and Music, Department of Art and Design